



言葉のまほう

校長 田名部 和美

カレンダーも残り一枚となり、白い息に冬の訪れを感じます。子どもたちは近付いてきた冬休みを楽しみにしながら元気に学校生活を送っています。

先日の朝会で『言葉のまほう』という話を読みました。主人公が人とぶつかってしまったときのやり取りの話です。急いでいた主人公は、ある男の子とぶつかり、「いたいなあ、よく前を見ろよ。このあわてんぼ!」とどなります。相手も「おまえがとびこんでくるのがいけないうら」と言い返し、険悪な雰囲気になります。翌日、主人公がスーパーでおつかいしているときに、角を曲がったところで人とぶつかります。しかし相手がすぐに「ごめんね、本当にごめんね」と謝ってきたため、「いいんだよ。ぼうっとしていたぼくも悪いんだから」と言って、落ちたみかんを一緒に拾います。「拾ってくれてありがとう」とお礼を伝えて話は終わります。どちらも人とぶつかったときの話ですが、最初の一言の違いでその後のやり取りや気持ちが変わります。

伝え方や言葉の選び方によって、これまでより仲良くなれたり、逆に気まづくなったりということはよくあることです。互いに気持ちよく過ごすためには、相手のことを考えた言動が必要になります。この『言葉のまほう』の話は、心理学でいう「返報性の原理」が働いています。「返報性の原理」とは、相手から受けたアクションに対して「お返しをしたい」と感じるごく自然な心理現象です。前段は「売り言葉に買い言葉」で敵意の返報性といわれるものです。学校生活でもちょっとした一言からトラブルになることが少なくありません。すぐに「ごめんね」という一言があったり、同じ内容でもほかの伝え方をしたりすればもっと良好な関係を築いていけるのになあ、と思うことが多々あります。話の後段のように、好意の返報性であればよりよい関係を築きやすくなります。笑顔であいさつをされればこちらも思わず笑顔で返す、ということが好意の返報性の一つの例です。



相手の気持ちを慮ることや、適切な言葉を選んで伝えることは、社会性を身に付けるために集団生活の中で育てていくべきことです。気持ちのよい言葉を選んで使っていけるように支援していきたいと思います。また、周囲の大人が子どもたちへ温かい言葉を選んでかけていくことも大切だと考えます。耳から入ってくる言葉が、子どもたちの語彙を増やすことにつながり、普段の言葉遣いに影響を与えるからです。温かい「言葉のまほう」をかけることで、相手を思いやる心を育てていきたいものです。